

## 浦河べてるの家の「主旋律」からコミュニティ援助の在り方を考える：『「べてるの家」に学ぶ』の鼎談のテキストマイニング分析

著者	いとう たけひこ, 小平 朋江
雑誌名	和光大学現代人間学部紀要
巻	13
ページ	63-70
発行年	2020-03-05
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00004746/">http://id.nii.ac.jp/1073/00004746/</a>

〈研究ノート〉

# 浦河べてるの家の「主旋律」から コミュニティ援助の在り方を考える ——『「べてるの家」に学ぶ』の鼎談のテキストマイニング分析

いとうたけひこ ITO Takehiko 小平朋江 KODAIRA Tomoe

- I — はじめに
- II — 問題
- III — 目的
- IV — 方法
- V — 結果
- VI — 考察
- VII — おわりに

【要旨】本研究の目的は、向谷地生良・川村敏明・清水義晴の鼎談から、浦河べてるの家誕生以来の思想と実践を貫くものについて文中のキーワードを手がかりに分析・考察し、一貫して流れる浦河べてるの家の哲学の現代的意義を改めて確認し、コミュニティ援助の在り方としての考え方への手がかりを得ることである。『「べてるの家」に学ぶ』における3人の発言をテキストマイニングにより分析した。ソーシャルワーカー、精神科医、映画制作者とそれぞれの立場からの発言の特徴が抽出された。「主旋律」という単語において浦河べてるの家の特徴である人間の弱さに対する共感の重要性が見いだされた。それらに一貫するのは、悩みや問題を排除しようとするのではなく、悩みを抱え込んで悩み続けようとする場所の尊重であった。コミュニティ援助への示唆として、「弱さ」のもつ創造性を公開し、発見したことを共有することで、みんなで生きていく開かれた関係をつくることであり、「べてるの家」的なものは、様々な場でつくれる可能性があるのではないか。

## I — はじめに

浦河べてるの家の理念で注目すべきは「弱さを絆に」と「弱さの情報公開」である。この重要性について向谷地(2008)は、「べてるの家の歩みから生み出された最も大切な経験知である。それは、人が誰でもかかえる『弱さ』に向き合う態度であり、『開かれた弱さ』ということも出来る」と述べ、『弱さの情報公開』は、その場に、助け合いと相手の立場を推し量る思いやりを生み出す力を創造する」としている。このことは、「弱さ」のもつ創造性についての言及であり、浦河べてるの家の理念から、今の時代的特徴を見据えたコミュニティ援助への示唆が得られよう。

筆者らは、2008年から約10年にわたり、浦河町で開催の「べてるまつり」(当事者研究や幻覚妄想大会が行われる)に参加してきた。浦河町以外で開催される当事者研究全国交流会などでも語りを聞き、資料を収集し、公開された語りの量的・質的な分析に取り組んでき

た (小平・いとう, 2012, 2013, 2015, 2016ab, 2017abc, 2018abcd, 2019 など)。

## II——問題

本研究の対象は、浦河べてるの家が誕生した当時から関わった向谷地生良 (ソーシャルワーカー)、川村敏明 (精神科医師)、清水義晴 (浦河べてるの家の映画制作者) の鼎談で、浦河べてるの家の原点を知ることができる貴重な資料である。

立場の異なる 3 人の語りは、多声性でナラティブ・アプローチに通じ、3 人の視点を通して、浦河べてるの家の誕生について学ぶことができる。

浦河べてるの家の誕生について学び、本分析結果を通して、「弱さ」を共有することで生み出される創造性から、コミュニティ援助の在り方としての考え方への手がかりを得ることは現代的意義をもつものである。

## III——目的

本研究の目的は、向谷地生良・川村敏明・清水義晴の鼎談から、浦河べてるの家誕生以来の思想と実践を貫くものについて文中のキーワードを手がかりに分析・考察し、一貫して流れる浦河べてるの家の哲学の現代的意義を改めて確認し、コミュニティ援助の在り方としての考え方への手がかりを得ることである。

## IV——方法

1996 年出版の博進堂文庫 20 『べてるの家』に学ぶ 鼎談 向谷地生良 川村敏明 清水義晴 (博進堂) をテキストマイニング分析した。

テキストの量的分析には、Text Mining Studio を用いた。単語と係り受けについて出現回数が多い表現を集計した。使用単語のネットワーク分析を行い、どのような話題が語られているのかを明らかにした。そして注目したキーワードの原文参照を行った。好評語・不評語分析でポジティブに用いられている単語、ネガティブな単語を抽出した。

## V——結果

### (1) 基本情報

総発話回数は 124 回で、その内訳は向谷地生良 40 回、川村敏明 41 回、清水義晴 43 回で、発話の回数は、ほぼ同程度であった。各発話の平均文字数は 194.0 字であった。延べ単語数は 4648 で単語種別数は 1432 であった。

## (2) 単語頻度分析：使用頻度の多い単語

単語頻度分析(表1)より、使用頻度の高い上位16単語は、「べてるの家」「思う」「人」「いう」「いる」「見る」「出る」「ある」「問題」「出会う」「良い」「わけ」「意味」「人たち」「病気」「生きる」であった。

## (3) 特徴語分析：3人に特徴的に出現している単語

特徴語分析の結果より、3人に特徴的に出現している単語は以下の通りであった。

向谷地生良では、「仕事」「昆布」「家」「形」「一人」「浦河」「おむつ」「スタート」「リハビリテーション」「結果」「住居」「発作」などであった。川村敏明では、「出会う」「医者」「意味」「向谷地君」「治療」「わけ」「テーマ」「精神病」「役割」「病院」「大切」などであった。清水義晴では、「べてるの家」「向谷地さん」「映画」「主旋律」「言葉」「人」「川村先生」「相手」「問題」「二十分」「成功観」などであった。

## (4) 注目語情報：「べてるの家」を注目語にした係り先

注目語情報(図1)のように、係り元単語を「べてるの家」では、係り先単語は「メンバー」「映画」「いう」「いる」「できる」「出会う」「来る」「学ぶ」「作る」「主旋律」「生まれる」「本」などであった。

## (5) 原文参照：「主旋律」をめぐる川村敏明・清水義晴の対話

本書の最終章である「鼎談を終えて」において、川村敏明と清水義晴により「主旋律」をめぐる対話が行われており、清水義晴の特徴語分析では「主旋律」が出現することから、特に重要な話題、キーワードと考えて原文参照を行った。それにより、浦河べてるの家の原点に関わる考え方を明確にできる可能性がある。

川村敏明と清水義晴は、浦河べてるの家誕生から深い関りのある向谷地生良と異なる立場にある。川村敏明は浦河べてるの家の当事者たちの治療にあたる精神科医師の立場から、清水義晴は浦河べてるの家の映画制作者としての立場から、少し離れた位置から、浦河べてるの家を眺めながら応援する立場にある。

以下に、「主旋律」を含む原文を抜き出し、その原文が出現したページを( )内に示す。

### 川村敏明

「あの人はいないほうがいい、あいつに出ていってもらおう」という全体一致の声になりそうになったとき、必ず『べてるの家』らしい、まさに主旋律の言葉として「彼は、やはり迎え入れるべき人なんじゃないだろうか、排除ということだけで問題は収まるだろうか」と誰かが言い出すわけです。(p27)

悩みや問題を排除しようとするのではなく、悩みを抱え込んで悩み続けようというこ

と自体が彼らの最も本質的な生き方で、悩みを排除するのは自己否定につながっていくという、非常に本質的なことを彼らはよく知っているんです。一見それが消えかかったとき、必ず誰かがこの『べてるの家』の主旋律を口ずさみはじめる。(p28)

#### 清水義晴

その「主旋律」という言葉がとても響くんです。外側からだけで見ていたのではわからないけれども、『べてるの家』の中にはその主旋律があって、それが色々な活動の基調になっている。(p28～p29)

『べてるの家』には、その「主旋律」を持っているさまざまな人たちがいますね。草創期からの佐々木さんや早坂さん。あの人たちの人間的な味わいには、すごいものがありますね。俳優なんかでも絶対あの味わいは出せない、という何か深い、受け入れてしまった人たちの豊かさがある。(p68)

## VI—— 考察

以上の結果から明らかになったのは、1996年に出版されたナラティブを対象としたテキストマイニングによる量的分析においても、単語に着目した原文参照による質的分析においても、「べてるの家」の理念と20年以上経った今日においても、ぶれること無く継続され、また当事者研究という新しい形も含みながら発展しているということである。それは、表1のように「べてるの家」をめぐる、使用頻度の高い単語は「人」「問題」「生きる」などと示された通りである。

本論文の目的との関連で注目したいのは、図1のように係り元単語を「べてるの家」では、係り先単語は「メンバー」「映画」「できる」「出会う」「学ぶ」「作る」「主旋律」「生まれる」「本」などの単語である。浦河べてるの家のメンバーに言及しながら、浦河べてるの家がどのようにできたか、生まれたか、についての語りであることがわかる。そして、浦河べてるの家のナラティブは「映画」や「本」などを始めとする多様な媒体により表現されている(小平・伊藤, 2008) ことを物語っていると考えられる。

特徴語分析の結果から、発話の内容として、ソーシャルワーカーの立場から向谷地生良は「仕事」「昆布」「家」「おむつ」「住居」などが出現しており、精神科医師の立場から川村敏明は「医者」「治療」「精神病」「病院」などが出現しており、べてるの家の映画制作者の立場から清水義晴は「べてるの家」「向谷地さん」「映画」「主旋律」「言葉」「人」「川村先生」などが出現しており、それぞれの立場の特徴がよく表れている。

立場の異なる3人の語りから、浦河べてるの家の理念誕生の背景ともなる原点が、単語の頻度や3人の特徴語、「主旋律」をめぐる対話などから明らかになった。当事者研究における「並立的傾聴」(向谷地, 2015) という「横並び」の関係、「『病気の体験を生かした』人

生をいつも大切にしてきたのが、べてるの人たちの選択した生き方」(向谷地, 2015) というリカバリーの考え方があるが、本研究の分析結果は、これらの背景ともなっている重要な在り処を物語っていると考えられた。

「主旋律」は川村敏明により「メロディー」という表現により、「失敗やエピソードの中に、いつもユーモア」があり、「本当に大事な部分」(p16) と言及されているところがあり、「主旋律」「メロディー」は浦河べてるの家の原点に関わる文脈で言及する際に出現する比喩的表現である。そこでは排除の論理とは正反対の浦河べてるの哲学を端的に表している。一番弱いところを大切にするという理念は、ぶれることなく今日まで脈々と継続していることが改めて確認された。

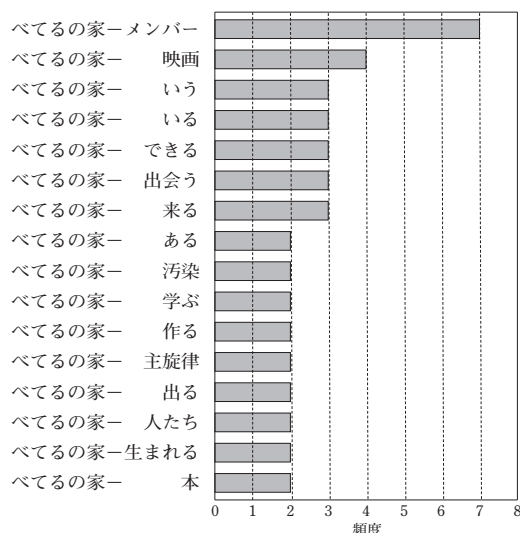
野口 (2018) はナラティブ・アプローチの観点から、当事者研究が共同研究であり、「公共的」であることの意義、オープンダイアログでは、「個人が取り結ぶ関係の変化が目指される」とし、「ひとりでも頑張れる能力ではなく、みんなで生きていく関係を作ること、そうすれば個人の能力は変わらなくても生きていける」と言及した。同時に、「共同創造 (co-production)」の考え方 (熊谷, 2017) を参照すれば、「主旋律」が大事にされることで、多様なコミュニティにおいて、「べてるの家」的なものは、つくれる可能性があるといえるのではないか。

今回の結果より、浦河べてるの家が生まれるには「主旋律」が必要であったと考える。そして、その「主旋律」は浦河べてるの家の場合、注目語情報 (図1) の分析結果の通り、「映画」や「本」を媒体として表現され、それが今日の当事者研究を生み出すに至ったと考える。筆者らは10年に渡り、浦河べてるの家の当事者研究や幻覚妄想大会に参加し、その語りの場に居合わせてきたが、今回の分析結果より、紛れもなく、浦河べてるの家の

表1 単語頻度の分析

単語	品詞	向谷地	清水	川村
べてるの家	名詞	32	33	28
思う	動詞	19	23	27
人	名詞	22	18	27
いう	動詞	20	13	31
いる	動詞	8	16	18
見る	動詞	15	9	17
出る	動詞	16	13	10
ある	動詞	9	10	19
問題	名詞	8	12	17
出会う	名詞	6	2	26
良い	形容詞	9	8	16
わけ	名詞	9	6	17
意味	名詞	12	2	18
人たち	名詞	12	5	13
病気	名詞	12	5	12
生きる	動詞	10	9	9

図1 注目語情報



「主旋律」を聞いていたのだと、あらためて言うことができる。

そしてそれは、当事者研究を生み出すに至った「弱さ」のもつ創造性であり、当事者研究として研究成果が公開され、研究成果の共有を容易にしてきたのである。この特徴を野口(2018)は、「公共的」であるとし、「みんなで生きていく関係を作る」と意義づけている。

やまだ(2009)のナラティブが共同生成される「場所」を重視する「対話的场所モデル」を通して考察することが意義深いであろう。「主旋律」をめぐる川村敏明と清水義晴の対話の中には浦河べてるの家誕生の頃から、「悩みや問題を排除しようとするのではなく、悩みを抱え込んで悩み続けよう」とする場所であり、その場所においては「それが色々な活動の基調になっている」のである。そして、この「主旋律」は、「三度の飯よりミーティング」と表現される浦河べてるの家の当事者研究をはじめとする語りの中で実現され、「対話的场所モデル」(やまだ, 2009)の考え方に通じる対話の姿があることが、うかがい知れる。

べてるしあわせ研究所・向谷地(2018)は「理念空間」という表現を用い、当事者研究における理念と研究プロセスを配置し、「そのような理念をもとに創られた場やつながりを『理念空間』」と述べていることから、「対話的场所モデル」(やまだ, 2009)の考え方に通じるナラティブが共同生成される場であるといえる。

## VII— おわりに

本書のなかで川村敏明が以下のように述べている。

このいろいろな失敗やエピソードの中に、いつもユーモアがある。これは『べてるの家』の中の、まさに「メロディー」となる大事な部分、本当に大事な部分だと思います。それで救われて来たんですから。(p16)

途絶えることなく流れ続けている浦河べてるの家の「主旋律」により、浦河べてるの家の「理念空間」で生み出された新しい対話の在り方は、「弱さ」のもつ創造性を公開し、発見したことを共有することで、みんなで生きていく開かれた関係をつくることであり、それは、多様な分野におけるコミュニティ援助の現場にとって示唆になると考える。多様なコミュニティが各々の現場の「主旋律」に気づき、メロディーが聞こえてくれば、弱さのもつ創造性から、「べてるの家」的なものは、つくれる可能性があるのではない。

### 《文献》

- べてるしあわせ研究所・向谷地生良(2018). レッツ!当事者研究3. 認定NPO法人コンボ
- 小平朋江・伊藤武彦(2008). 精神障害の闘病記:多様な物語りの意義. マクロカウンセリング研究. 7, 48-63.
- 小平朋江・いとうたけひこ(2012). 統合失調症の闘病記のリスト:ナラティブ教材の可能性を展望する.

- 心理科学. 33(2), 64-77.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2013). 統合失調症当事者の語りのテキストマイニング:闘病記のタイトル分析を中心に 看護研究, 46(5), 485-492.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2015). 当事者研究の可視化:テキストマイニングによる探求 第12回当事者研究全国交流集会 浦河大会 [DOI: 10.13140/RG.2.1.3372.7762]
- Kodaira, T., & Ito, T. (2016a). *Visualization of Tojisha Kenkyu studies: A text mining approach to recovery (and discovery)*. Poster session presented at the 19th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS 2016), Chiba, Japan. [DOI: 10.13140/RG.2.1.3712.1689]
- 小平朋江・いとうたけひこ (2016b). 当事者研究とリカバリーの思想:向谷地生良(2015)『精神障害と教会』のテキストマイニング分析. 第36回日本看護科学学会学術集会
- 小平朋江・いとうたけひこ (2017a). 『こころの元気+』からリカバリーを発掘する! こころの元気+. 11(3), 21-23.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2017b). 浦河べてるの家の当事者研究の語りとリカバリー:テキストマイニング分析 心理科学. 38(1), 55-62.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2017c). べてるの家の当事者研究における自己病名と研究テーマのテキストマイニング:メンタルヘルスマガジン『こころの元気+』を分析対象にして 日本質的心理学会第14回大会 in 東京プログラム抄録集. 74.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2018a). 精神障害をめぐる「家族のストーリー」におけるアンカバリー (公開)・ディスカバリー (発見)・リカバリー (回復):連載記事のテキストマイニングからみた家族会などの活動の重要性 統合失調症研究. 8(1), 133.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2018b). べてるの家の当事者研究におけるアンカバリー (公開)・ディスカバリー (発見)・リカバリー (回復):研究目的に焦点を当てたテキストマイニング 日本精神保健看護学会第28回学術集会・総会プログラム抄録集. 145.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2018c). 浦河べてるの家におけるビジュアル・ナラティブ:当事者研究とべてるまつりにおける多様に外在化されたもの. 日本心理学会第82回大会
- 小平朋江・いとうたけひこ (2018d). 当事者研究を研究する. 第15回当事者研究全国交流集会名古屋大会抄録集. p44.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2019). 当事者研究をテキストマイニングする.:共同創造 (co-production) の可能性. 第16回当事者研究全国交流集会 in 浦河大会. p17.
- 熊谷晋一郎 (2017). みんなの当事者研究. 熊谷晋一郎 (編) みんなの当事者研究 臨床心理学 増刊第9号, pp2-9. 金剛出版
- 向谷地生良・川村敏明・清水義晴 (1996). 「べてるの家」に学ぶ. 博進堂
- 向谷地生良 (2008). べてるな人びと 第1集. 一麦出版社
- 向谷地生良 (2015). 精神障害と教会:教会が教会であるために. いのちのことば社
- 野口裕二 (2018). ナラティブと共同性:自助グループ・当事者研究・オープンダイアローグ. 青土社
- やまだようこ (2009). 対話的場所モデル:多様な場所と時間をむすぶクロノトポス・モデル. 質的心理学的研究. No.8, 25-42.

\*小平・いとうの論文は、itotakehiko.com/papers より、学会発表資料は、itotakehiko.com/conference-1/より取得可能。



謝辞:本論文の着想と執筆の大部分は小平が行った。テキストマイニング部分はいとうが担当した。

これまでの貴重な交流と研究の機会を下さいました浦河べてるの家の皆さまに記して感謝します。資料整理では木下恵美さん・阿部恵子さんに記して感謝します。

本研究は JSPS 科研費 19K10942 (研究代表者:小平朋江 研究課題名「統合失調症当事者の自己開示・自己発見・リカバリー:ナラティブの質的量的分析」) の助成を受けた。

付記:本論文は、小平朋江・いとうたけひこ (2019,9月) 鼎談「『べてるの家』に学ぶ」から学ぶ:テキストマイニングとキーワードの分析より (日本心理学会 立命館大学) でのポスター発表されたものに加筆修正したものである。本研究における利益相反は存在しない。

---

[伊藤 武彦・和光大学現代人間学部心理教育学科教授]

---

[こだいら ともえ・聖隷クリストファー大学看護学部看護学科]